

# 山本隆司先生を送る

立命館大学政策科学部長 重 森 臣 広

本年度をもって山本隆司先生が定年退職される。先生は1976年に本学法学部を卒業され、本学大学院法学研究科を経て、1981年4月に岐阜経済学経済学部にて専任講師として赴任された。その後、1993年4月に奈良産業大学（現奈良学園大学）法学部教授をおつとめになり、1996年4月に本学政策科学部教授としてお迎えすることになった。政策科学部の開学が1994年4月であるので、先生の本学における20年間は、本学部の歩みとともにあったことになる。学生主事、副学部長として学部運営にご尽力いただいただけでなく、大学全体の改革事業にも大きなご貢献をいただいた。2007年4月に新設された本学大学院公務研究科では副研究科長として研究科開学時の重責を担っていただき、また、学生部副部長、キャリアセンター副部長、大学協議員など大学運営にもご貢献いただいた。

先生のご専門は民法学、とりわけ債権法であり、その知見をもとに医事法、消費者法の分野でも多数の論文、著書がある。政策科学部においても法律学は、教育研究分野のもっとも重要な柱の一つであるが、所属教員の研究領域、学生・大学院生の知的関心は、先生が学生時代を過ごされた法学部とは大きく異なっている。とくに教育面では、「なぜ法律学を学ぶのか」「なぜ民法学の知見が必要なのか」といった、おそらく法学部の学生にはあまり必要のない問いへの回答から講義や指導を始めなければならないご苦労があったものと思われる。ローマ法にまで立ち返りつつ、民法典制定以後の民法学の研究と教育の足跡を主題とされた先生の最終講義は、そうしたご苦労にたいする応答の集大成であったのではないだろうかと改めて思う次第である。

学部・研究科・大学の運営、学生補導など私たちの日常業務を通じて、先生が絶えず私たちに想起させてくれたのは正義とその運用の難しさではなかっただろうか。個別事案を扱う際に、私たちはとくに感情に流されがちである。取り扱いにくい課題に直面したとき、一般的なルールを杓子定規に適用して安直に処理してしまいたいという誘惑にかられることもある。そうした局面で、*Fiat iustitia, et pereat mundus*（天墮ちるとも正義をして行なわしめよ）、*iustitia sine Misericordia crudelitas est*（慈悲なき正義は残酷なり）——両者を念頭におきつつ、最適解を見出そうとする先生の推理にはいつも感服させられたものである。

先生は無類の読書家でもある。大学教員であるので読書家なのはあたりまえかもしれないが、先生の読書の範囲はとてつもなく広い。とくにここ数年は、科学革命とそれを生み出したヨー

ロッパの知的世界の変容に関わる分野にご関心が集中していたように思う。単に本を読むだけでなく、読んだ本、読みつつある本について、あらゆる機会をとらえて紹介してくださり、論評してくださった。私は密かに先生のことを「歩く書評欄」と呼んでいたものである。おそらくこの「書評欄」の「愛読者」は多かったはずである。

先生には、立命館大学名誉教授、政策科学部特任教授として、これまでとは別の視点から政策科学部・政策科学研究科をご指導いただくことになる。本学部教職員・学生を代表して、これまでのご業績をたたえ、またご苦勞をねぎらい、政策科学部・研究科の発展にご尽力いただいたことに、感謝の意を表したい。

2017 年 3 月